李寄
訓解 改正月令博物筌 五月部 二

529
6

二 5
529

五月之部目録

△印ハ俳諧の季と持なし

○養生の法○風雨の考○米の豊凶○妙薬其外人家重法の事い所々の数多ある故目録よハ有るなり

五月

卦 月支 調子 初丁
陰陽生 異名

△芒種節 △梅雨 五丁

△夏至中 四丁

日令 此部ハ五月日の定りとする事なくそろこゝに有るす

朔日

△上巳茂足揃 五丁

△松本祭 五丁

三月

△菖蒲 五丁

△菖蒲輿 六丁

四日

蓬浦葺 △蓬 六丁

△内膳司供早瓜 六丁

五日

五日節會 六丁

△左近真手番 六丁

△右近真手番 六丁

△左近手番 △右近手番

△右近真手番 六丁

△騎射 △馬弓 七丁

△端午節 △端五 △重五 七丁

端午男女衣服 八丁

生花の式 八丁

菖蒲引 △永根
△菖蒲鬘 △菖蒲槍 △夏蒲 △菖蒲帝 △おちの佩
△菖蒲酒 十丁
△菖蒲湯 △菖蒲湯 十丁
△菖蒲冒 削懸の甲 十丁
△懸 △ゆさう甲 五丁
△印地打 十丁
△藥日 △製神麹 十二丁
△藥玉 十丁
△長命縷 △続命縷 △偈縷 △五彩王 △辟兵縷
△藥草摘 △業州 十二丁
△競射 十二丁
△闘百草 △草合 十二丁
△神水 十丁
△五月鏡 △石鏡 十二丁
△粽 △角黍 十丁 △茨粽 十二丁
△笹粽 △飾粽 △錐粽 △秤錐粽 △飾粽 △益粽 △九子粽 △芦粽
△柏餅 十二丁
△射粽園 十二丁
退水神 十丁
△桃印府 赤眉府 十四丁
△艾人 △蒲人 △戴艾虎 十四丁
△画天師 十四丁

六日 七日 八日 九日 十日 十一日 十二日 十三日 十四日 十五日 十六日 十七日 十八日

△去鴟 △鴟 △鳥のあうり物 十四丁
△梟羹 十四丁
△競渡 △鳥車 △水馬 十四丁
△賀端午文 十五丁
△賀競馬 △八馬 十五丁
△藤森祭 十八丁
△生玉流鏑馬 十八丁
△関明神祭 十八丁
△六日菖蒲 十八丁
△宇治祭 十八丁
△植竹 △竹酔日 △竹遷日 十八丁
△室祭 十八丁
△今宮祭 十八丁
△雨社祭 十九丁
△有無日 十九丁
△虎涙雨 十九丁
△佳き御田植 十九丁
△山田御田扇 十九丁
△祇園会洗 十九丁

月令 此部より八日の定まりざる五月一ケ月のことなるを

△最勝講 十九丁
△賑給 十九丁
△富士ぢり 十九丁
△内宮外宮御田植 十九丁
△瀑布 △麻布 △生布 △木平 △半さし 十九丁
△さしし賣

△半夏生　廿一丁
△大原さう　廿一丁
△締　△草りの△つゝる花　廿一丁
△覃羽織　△子羽　廿一丁

時令

此部ハ七月の時候ヨリかゝるとかゝ

△五月雨　△梅雨　△ばいう　廿一丁
△さゝき雨　廿一丁
△五月闇　廿一丁
△白えん　△えん　廿一丁

草木

此部ハ五月一月の草木のるゐなあつむ

△樗花　△雲こんぺい　廿一丁
△山梔子花　廿一丁
△柘榴花　廿一丁
△黐樹　廿一丁
△女貞　△ゑつぐら　廿一丁
△南天花　廿一丁
△栗花　廿一丁
△杜鵑花　廿一丁
△要花　廿一丁
△合歓花　廿一丁
△榊花　廿一丁
△百合花　廿一丁
△車百合　廿一丁
△姫百合　廿一丁
△児百合　廿一丁
△唐百合　廿一丁
△秋百合　廿一丁
△鬼百合　廿一丁
△糸百合　廿一丁
△紫陽花　廿一丁
△紅花　廿一丁
△天門冬花　廿一丁
△下毛花　廿一丁
△蜀葵　廿一丁
△錦葵　廿一丁
金銭花　廿一丁
△金銀花　廿一丁
△夏菊　廿一丁
△尚香　廿一丁
龍葵　廿一丁
△金盞花　廿一丁
△時計草　廿一丁
△咸昊仙　廿一丁
△宣州花　廿一丁
帰李　廿一丁
△美容柳　廿一丁
△未央柳　廿一丁
酢漿草花　廿一丁
△蛇苺子　廿一丁
△蕺菜花　廿一丁
△草石蠶　廿一丁
△葵花　廿一丁
△天南星花　廿一丁
△苔花　廿一丁
△朝菊　廿一丁

△蕓豆引 五ノ 北八丁
△花且見 五ノ 北八丁
△菖蒲 五ノ 北八丁
朝露州 五ノ 北九丁
△蜘帳釣草 五ノ 北九丁
△萍花 五ノ 北九丁
△鉄線花 五ノ 北九丁
△[illegible]
△[illegible]
△田植 五ノ 北一丁
△田歌 五ノ 北一丁
△早苗 五ノ 北一丁
△若竹 五ノ 北一丁
艾 △艾刈 五ノ 北四丁
△石菖 五ノ 北四丁
△蟻豆引 五ノ 北八丁
△花菖蒲 五ノ 北八丁
長根草 五ノ 北九丁
△藻花 五ノ 北九丁
△撫子 △蠟燭 五ノ 北丁
△菱花 五ノ 北一丁
△田草取 五ノ 北一丁
△早乙女 五ノ 北一丁
△[illegible]
△[illegible]
△竹品類 五ノ 北三丁
△真菰刈 五ノ 北四丁
△和布刈 五ノ 北四丁
△海帯刈 五ノ 北四丁
△李子 五ノ 北四丁
△揚梅 五ノ 北五丁
無花菓 五ノ 北六丁
天仙菓 五ノ 北六丁
氣條桃 五ノ 北六丁
△枇杷 五ノ 北六丁
△青梅 △梅漬 五ノ 北七丁
△梅を干す
○梅ゐ〜
△梅ひき
△杏子 五ノ 北七丁
櫻桃 五ノ 北七丁 季ハ三月
△桑実 五ノ 北八丁
△青小柚 五ノ 北八丁
△生胡桃 五ノ 北八丁
△薑 五ノ 北八丁
△茄子 五ノ 北八丁
△瓜花 五ノ 北八丁
△早松茸 五ノ 北八丁
△新茄子 五ノ 北八丁
△胡瓜 五ノ 北九丁
△早瓜 △浅瓜 △白瓜 五ノ 北九丁
△栗蒔 五ノ 北九丁
△姫瓜 五ノ 北九丁
△粔蒔 五ノ 北九丁
△粗蒔 五ノ 北九丁
△胡麻蒔 五ノ 北九丁
種植 五ノ 北九丁

生類

此部ハ五月一ヶ月のうつくしいさまをあつめしるす

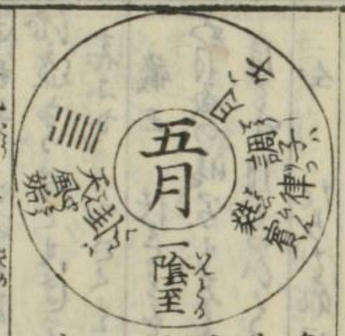
△獣狩 五ノ四十一
△鹿子 五ノ四十一
△水雞 五ノ四十二
△永鳥巣 五ノ四十二
△毛ゝ替鷹 五ノ四十二
鵑鳴初 五ノ四十二
△蛆 五ノ四十三
△小鰺 五ノ四十三
△水馬 五ノ四十三
△蛇脱皮 五ノ四十四
△熙射 五ノ四十二
△魚簗打 五ノ四十二
△黒鴨 五ノ四十二
△諸鳥老替 五ノ四十二
△鶯収音 五ノ四十二
鶉の巣 五ノ四十二
△初蟬 五ノ四十二
△蠅子 五ノ四十三
△鼓虫 五ノ四十三
△蟭螟 五ノ四十四

五月必用

此部ハ風雨の占○破軍の向方○日取の吉凶○他行の心得○作事のよう〳〵色〻料理献立の法食物の好悪等を〻の外重法のこゝ品々あつむ尤日の定りなき事ハ日令の部あり爰ハ日のさだまりしなき五月一ヶ月の要用のみをあつむ

五月之部

△印ハ季を持つものあり



○天風姤い女の莊んある卦人嫁とりうしし不貞のかゝらあり

異名

△仲夏△鶉月△皐月○南訛○蒲月○夏五△夏半△盛夏△蕤賓△さ月△早苗月いついろ月△むめのいろ月たくさ月 莫傳ヨリ出 吹蕤月 藏玉ヨリ出△たちくる月△さゝも月△月ゝを月

異名註

△仲夏ハ夏のおりゝ△鶉月ハ月令ヨリ日月令ヨリ首ハ星の名なり○南訛ハ書經

又平秩南訛とあり夏時物のさくんかあり變化さくべさくさく

○蒲月　蒲は菖蒲の事之○夏五夏のおうぞ〳〵夏半是も夏のあうばへ　盛夏あつの盛とあり

△蕤賓　蕤は下垂て主く賓は客と陽氣上まきぼると陰氣主人と

ありて客と敬とるの義あり　即ち五月の律あり○早苗月は早苗とる月なれいなり○さ月さあく月と暑きとるあり

(三)　秘藏　さくを月

沈逢　沈はもはるあめ月

蓄ふかざつつさくも月とて

藏玉　はさとうと月

有夏の時ろも又あめ月

月ミ月といひとうめくん

仝　たちたれ月

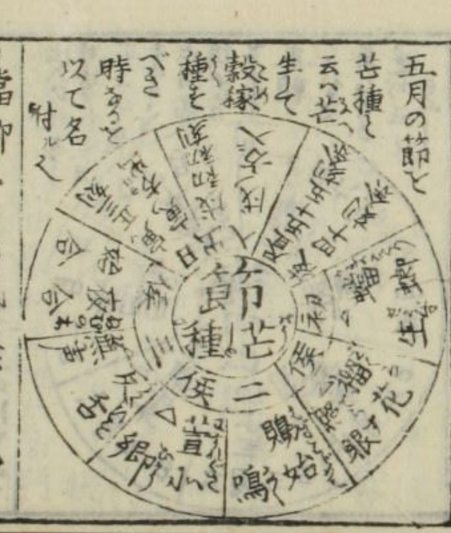
ミろ代ろ槽月の名を名て

あのぶひとのなりひそみん

節　△芒種○七十二候○草木七十二候○晝夜長短○日の出入等左に記ス

五月の節と

芒種と云は芒ある種を生して穀類を種をべき時あると以て名付る



○螳螂のいろの氣陰なり此月一陰下に生ずるの氣陰の氣を感じて螳螂生ずる此虫を物を向ふ時いろとおゝらとん

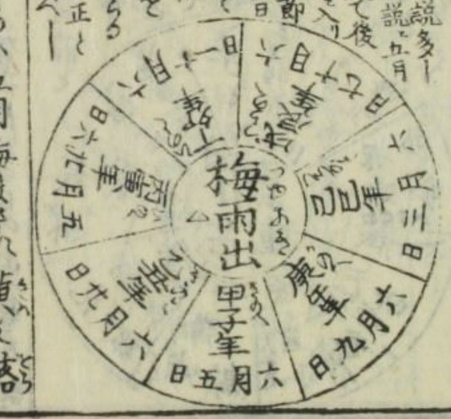
○鵙は陰類物を殺ることを喜ずる鳥と一陰の巳が好氣の生ずるを感して鳴る○反舌は鶯なり是は春の始陽氣を悅んで來り鳴く一陰の氣とさけて音を入るなり

節白侯

今日雷なれば豊年あり○雨降れば旱の兆稲多く空し○芒種の雨一すじ梅雨一尺に當るとかや是をそなめとか此日雨ふまこべ多くい旱○雨あり〻くいつゝも多〻ばこの日中ふ一丈の竿と立て景を測る四尺二寸三分あれば成年す

梅雨出入の説

次の九の肉に記せる年のほも出入の説多し時珍が説に五月節に入て後壬の日に入り六月節に入て後壬の日に出と本朝これを用ひらるべし正しからず



按ずるふ五月梅雨に黄く落んとす柘榴の花ひらき栗の花

とち蘂の子ちまるふ蘂るの比長雨あり是を梅雨といふ雨甚だ多〻ずして石ずゑあり物くひと生を雷鳴を以て出梅とす○京師烏丸中立賣下町のちまこ又大徳寺門前の人家のけしろ井又梅雨の穴あり其時は至て水ゝ紀ゝ州丹生の山田栗花咨理左衛門宅の井あり往二尺深サ一尺梅雨に入て水必ずく出梅の比水やゝく

梅雨天氣

梅雨に多く西風南風なれば山の端に雲なく風つよく紀時いふゝと風ふく空に雲多く天氣くゝくるれば雨の内朝東風二三日はく事て吹ば空も白くなる是を船頼風といふ雨ふるゝ○雨ふるゝて

とゞろく雷鳴これを頃とす然
らんとして梅雨の内は雷少なく
鳴い洪水と主ふ夜鳴り或い沖へ
さゝり入ものいとぐて宜しゝ

重條

(三句) 新題林
春さ祭の志ぎろ弁よしはちそ
雨ふるはく梅もめづらし

(連) 白へ春やとはあ梅の花　紙の面　昌休
(詞) 白さへ黒さへ　黒さへ　白さへ　梅の面　紹巴

(俳) 言浦ゆも志ろやうの梅なる　貞徳

妙術

梅雨水

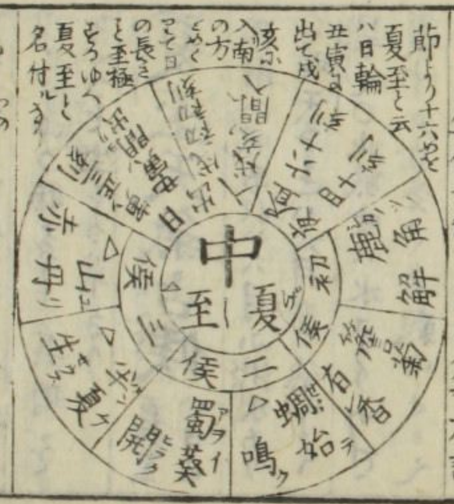
蟹を入貯へ置べし
茶を煎すれば甚美へ
瘧疾を洗へば其痕なしてる〜
醤油を造るに熟し易し其外
衣を洗ふに用ゆ灰汁ゆゑ
ゝるまゝ此水久しく貯へ
○はるもかびるゝと去るまいひろど
を用ひ頻るゝ即ち落るく

梅雨養生

梅雨中の湿を散ずるに蒼朮を
火に焼て煙とかぐべし雨湿
病と生ずるゝ〜

中

○夏至○七十二候○草木七十二候
○昼夜長短○日の出入等左記



節ゝ十六ヶ所
夏至と云
八日輪
丑寅の方
出て戌
亥の方
入南
の方
て日
の長さ
と至極
ゝゆく
夏至と
名付る

鹿の角はもつて三ッあり左右合
せて六ッあり十二月に一陽生
此月に六陽終り一陰生ゝ
氣に感じて角と落ゝ鹿い
ゝより六陽の氣を感じて
六月あて生ゝるゝのく○蜩

いせこうり其声を聞くハ人の心とをゝしむる陰虫あり

微陰を感じて鳴そゝ蟬の初声ともつて○半夏い暦の時候ハ也ゝ半夏生ゝまるゝて種物とぐるを古代より此前後を以てうゆる物多し其時を ちぐゝど生そる草ゆり

夏至天氣占候 夏至の日

西南の風あれい六月ハ淋水あり

○晴天ゆるまい六月暑氣つゝく

旱ゝ○北風吹ハ水さゝるゝふて

夏中タ立多く米穀ゆさゝく

○夏至中旬ハあるまい豊年ゆり

下旬ハあるまい米價貴ゝ○當日

雨ゆる公淋時ゝゝ久雨を主ゆる

ゝゝゝゝゝゝゝゝ小雨い宜ゝゝゝ

○黒雲多くい水難ゝゆ○日ハ

暈あるまい洪水ゆり○雷鳴ハ

六月ひでり甚ゝ○午の時南

方ハ赤雲あるい五穀大ハゝの

ゆる赤雲なく日月ハ光なくい

五穀うゝゝどゝ人病多ゝ

夏至養生

夏至の當日井とゝゝゝ水を改まい瘟疫を病ど○夏至の日夫婦の交りをゆる公忌む千金方ゆ出ゝゝゝ

月令ゝ此日韮ゆふく其外ゝさきりのを食せゝゝ淫欲を犯をゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ今日日の長さ事極ゆる。陰陽爭天地死生ゆてゝ男

子斎戒して声色を止め騒事なく心氣を定め保養こゝぶべき日なり

日令

此部は五月一ヶ月日の定る事文の定る事と記と

朔日 **天氣** 今日晴天なれば五穀よかるべし○雨ふりぬれば五穀米價貴し 北風は猶さら悪し

○東風半日吹は終日吹は米の價貴し

養生 今日沐浴

これは無病ふして老ひゞ

京 上賀茂 足撮 くれはけいでの もろとも

(俳) 落うるぶこふ用 えやはとろく 光雪

近江 松本 祭る

神は平野大明神へ

○松崎永室祭

二日 **南都** 眉間

寺聖武帝三尊像開帳

三日 **天氣** 今日晴天 篠あり

献菖蒲 今日内裏へ奉ふとる

左右の近衛兵衛の六府あや

菖蒲輿

免の輿と南殿の階の東西に立又時の花をかりそめ

京 高雄虫干三日より九日を

四日 **菖蒲葺** 屋根の軒に置とふと云

公雄

(歌) 玉葉集

今日しもあやめ引そふ宿の

彩霞ふるあり菖蒲

(俳) 菖蒲ふく 形町の彩づき起渡

此頃より盛夏まで毒虫多く生ずるより軒に蓬菖蒲をかさうるも虫の入らぬもの

蓬葺 是もあや同し

江戸 三の輪 祭

棟菖 俗ふぜんぐさ

内膳司

供早瓜　山城の御園より供〻奉るなり

五日就日天氣　本朝茶賈の諺ふ四ヶ月三日五が五といふことあり四月三日と今日との晴と以て豊凶を定め價の高下とするを晴と豊年曇を凶年とするなり

五日節會　天子武德殿に出御ありて宴會と行はれ群臣に酒を賜ふ人々皆あやめのくすだまを典藥頭はくえを奉る事をとあり公事根元に出

左近真手番　左近の馬場にて騎射とる事なり右近の馬場にて六日に是をひらくなり今日近衛の隨身褐の尻を引折てきるゆゑなり

日といふ左近のあゝ手番は五月三日右近は六日なり（能人の受は）

騎射　五月五日　馬引くなり山川

豊楽院にて昔は弓を御覽せ

ことあり是を馬弓といふ

（今年中行事）服はいまくすりこしらへよゆゑ今やうの人為盛

端午の節　端五とは初五といふ五の始なり日は今月の五は始て端といはるもちゐめとも訓ず或は五月五日ゆゑ重五といふ又午は月なるゆゑ端午とも書く一說に午は五と通用をもつて五の字

五日異名　△重午　△重五　○端五　○端陽　○地臘　○蒲節　○解粽　○天中　○艾節　○朱符

異名註

〇重午 午の日を用ひられ
ばかさなるゆへ〇重五
い五月五日なれば〇解粽
節ハちまきをとく也〇
端陽 正陽の同し。地臘
一陰生ずるゆへ其外の異名
文字のよこにありてもろ〻
艾節 八世日蓬を作る虎を門に掛
けく邪氣を拂ふ也〇妻〻く蚊出
端午 衣服 今日より帷子を着す
袴なをぎ色又淺黄

女衣服

女もひとへのうす
物のかさびく〻
上襲 いもぜ のあるをうらぎさ
ふをさもぜ の色筋をうしろ
めもとこと〻節句ハ花あやめのも
ようちう或いむ〻さたいろう

生花之式正

菖蒲 花菖蒲
石竹 蓬

菖蒲引

菖蒲苅
新勅 前関白
深くさしはきあ〻ふあ〻ろくあやめ葺
年の緒ながくたのもしき色ひく
夫木 寄菖蒲祝 為相
君が代のこゝしそうむまを谷ゐの
ながをうれあやめ引くをなり〻を
夫木 江中菖蒲 仲正
あやめ葺いくとやもろれあくこもて
ゆくをこの沼をふかをふてをもん
詞 世沢のあふれ袖ぬれてひく。
ぬまこゝふ為て行。ふかを
長谷ふ世りそもちて引

詩 菖蒲 字對句

揮鎌若轉月 緑成玉床蓆
拂水生連珠 頂業清夜娯
永根 哥 あやめ葺ふ根
とよむる永承六年

五月五日あやめの根合とて
こしらへ著問集に出さう
(あ)夫木 さつきまつ花のたちばなかをるとは
くもゐやまもこのひぐらしなくらん 後頼

△菖蒲髪曼 聖武帝の時に初る 続日本紀に出さう

△菖蒲案 菖蒲生流を黒木
の案にて奉ると有り

△菖蒲枕 (あ)夫木 後頼
床ねられぬよあやめの
はぐくみてきそれをく
せよとやよいのみぢかさ

△菖蒲
帷子 △菖蒲浴衣 明月記 宗和
(俳)あのまはるも上巳あやめを

△菖蒲
帷子 △菖蒲
帷を
とりて帯物とすること悪気と
辟るくと 諸類本艸に出つ 俗云
せんどんの木とて人なるものなり
(俳)煙帰てひぐとやあび有嵐雪

△菖蒲酒 石菖を切て酒に浸し
たして是をのむ 雄
黄を少〳〵ぐらうろうへてもとく
よく〳〵一切の邪氣をさる (俳)
丞や茗の下なる
菖蒲酒 家定

△蘭湯 蘭を
湯に入てゆあみすること
大戴礼に見へたり

△菖蒲湯 百節の菖蒲は万病と
治をふさう 蘭湯を
どの故事ようおこるなるべし
(俳)湯あつしも命和ふる菖蒲かな道之

△菖蒲刀 いまゝへ菖蒲と
刀のうぶ そ菖蒲づくりとも
(俳)左刀風のやうにさぐ身く 移竹

△菖蒲冑 △削懸の甲
是も菖蒲七鍬

幟 △飾甲 ○此日幟甲をかざる
事は光仁帝の時蒙古の

賊来る早良親王討手として出陣あり親王伏見ふぐ
森社に祈る時に五月五日忽に
風吹て戰いとして勝事を得
こと此例ふるりのく唐ふも
今日武事とすると戯とを
と事類書纂要に出ふる自
然に此月武備とすると和漢
合せしるべし
(明)疱瘡の法とろふ幟る其角
女にはよりのあるべしの
俗説にはよりの作向てのぼりれ　移竹
(狂)忍ぶれど浮世にやふるあ花
綱もよりとろる紙のぼりうる　紅雪
印地打　童の小弓と持て戯
とる寺幸騎射ふる出
ろう印地とはもとの跡の堆付て
印地とくるふうて名付る
(明)そ人にあるとは常地のそつて嵐雪
弦出てなりも吹々り印地打　移竹

薬日

(家)新撰六帖　貫之

はるるくたちすあや
はるるくたちすあや
○今日と薬日とし日はそ
或は九散と調合ふう中に
も今日制をべき薬を記す

紫金錠　諸毒を解し腫物と
滑し毒虫とさる神方ふり
五倍子　大戟十五　續髓子十五
麝香五分　右細末して丸と其外
豊心丹。固本丹。延齢丹。反魂丹等
として今日調合ふとよしとす
或は神麯今日製を
ふし明日もよしとす

薬玉

中宮上総

(ち)夫木
あふとくとふ
ふとうのあ
○今日薬草と五色の糸とて
の人臂ふかくまは悪氣を拂
ふとや寄ふ

ちまき 是今日菖蒲を用て故
長命縷 續命縷 辟兵縷 風俗通 條達 初学記

皆紊玉の事なり 五月五日玉をかいへる

非 紊玉でいろを変るあの神 正立

詩 續命縷之詞 萬楚

西施謾道浣春紗 西施ハ呉ノ美人ナリ
浣紗石ハ故事ナリ 碧玉今時鬪麗華
碧玉モ春秋ノ時ノ美婦人 眉黛
器量ヲクラベアラソフガ
奪將萱艸色 ナルハ草ノ碧ナル
ヨリハ色 紅裙妬殺石榴花
ウルハシ
モスソノ紅イナルハ花ノウルハシク
見事ナルヨ子タムバカリナリ

新歌一曲令人豔 唱ヲウタヘバメ
ツラシク人々ノ心モ醉舞雙眸
ウキタツバカリナリ
斂髻斜酒ニ醉テ舞ノ袖ヲカ
クミ 誰道五絲能續命カ
タリ

シカラ五絲續命ノ故事ヲ
イヒフタヘレ コノ故ヲ見テ
却令今日少君家 其美兼
イフ失ヒ死セントス
思フバカリナリ

藥草摘 今日收採をはし
て製 艾を取
すべし

競渠刈 是も百草を採
む事を或競
駈競 特 茶儻 云
(方)万葉 杜若 ちめまとうつぎ
ちまをひぐうする
月ふるつとをり

鬪百草 色
の草をとりあつめて勝負を爭ふた
りすまし人 荆楚歲時記出
神水 今日午の時雨ふり急
小竹を切べし 竿の中ハ
ちまる神水のり是をのめば百
病を治す或ハ丸薬を製すべし
五月鏡 (方)玉薬 為家
みるをとおいの

浴のまする競々人よう
かあやうの初々人 百練

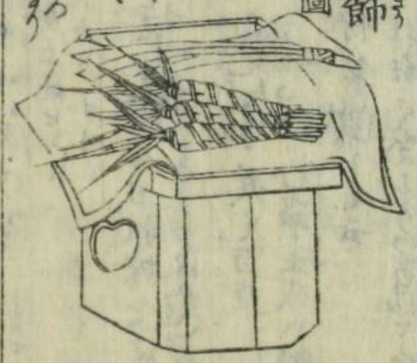
鑑 今日午の時楊子江にて銅を百度びさこと明鏡を鑄る事文類聚に出づ是を以て本朝奇ふも詠すると

粽 異名 角黍 角粽 九子粽 角粽 雞粽 秤錘粽 笹粽 飴粽 蘆粽 紙粽 餅粽

粽飾之圖

粽ハ千巻

柏餅 ひらしきのかちの葉に柏もの神道



ふ用ゆるなめでそれりのあれば
めちゆるなる屋しそべあ
今日のかざりの毒邪を捕人
ためく夏ハ毒虫多く人の家ふ
も入り来るにより粽の蛇の形ふ
表を是を食すれバ彼を降伏
せる心にて夏の中ひざこいる
き事を表して説をあるべし

明 亥ちぬ女は粽をうこ愚貫
まれ戸やうまそ芝の如び粽 其角

狂 者人ふ〜ふ中ふ日れよ丈の食の
数も八ふ夏ま粽をば 行安

詩 粽之詞 唐 慎之

南薰應律轉宋旗 五月八午二屬レ南
方ヲ主ル色赤シ・火帝 桑離錦席 夏ハ火應シテ神ヲ火帝トス易
二テハ離ノ卦ニアタリテクワ桑ニ坐
席ヲカザル 榴吐千花 蒲羽蓋 ロノ花ノ紅キヌガサニ映メ美シ 黄開五葉 捕

瑶堺 堯ノ時蓂莢アリ一ト月ニ一葉ヲヒラク昊草ナリ 瑤堺 ハタヽレクニワ禁裏ノ御庭ナリ

仙人掌 天ノ甘露ヲ承盛ル器之ソノ制仙人ノ像ヲウクリ手中ヘツユヲウクルヤウニコレヲハタリ

金縷遥分

承盤錯出

織女絲 故事ヲ用ヒサヘヒ得タリ

復道龍舟 此日蛟竜舟ヲサヘギリレ古事アリ

方競渡

街恩更許向昆池 天子ノ恩惠ノ詔命ヲエテ御池ニ舟ヲ浮ヘルコヲ勅許セラルヽナリ

蛟食芳辰 屈原今日汨羅ニ没シ後人これを祭る其祭供を蛟龍のたゆふらん夢よくれとほぎて五色の糸を以て粽をゆひ結くくれ角粽の始めく委しく本篇博物全ク見へたり

射粉

潘粉園 水園白園唐の一世ノ宮中ニて團子とけらり金盤の中ニ置テ矢ヲ射て食らる事天寶貴事ありし

退水神 唐士高戟氏ノ子海ホ沉ミ其夫水神とうりて人をうやまず故ニ五色の糸ヲそ粽をゝて海ニ入れば則ち五色の蛇とるゆへ水神おそれて人をうやまさるし

桃印符 ぬり繁字ヲて符と書ぐうふ凡帳ニかゝ置て悪氣をはらう術

赤霊符 今日この符をくれて兵乱を防ぐ吸唱

艾人 唐土ニ艾昔蒲ヲとて人形をつくり虎の形をなしうり門戸のうへかゝる 蒲人ともいふ

戴艾虎 唐土にて艾にて虎を作り黒豆にて目をなる小虎を色々に糸にて作り艾の葉につけ頭にいただきて邪氣をさけらる事也

畫天師 張天師の像を画かきて又土にて作りて艾にて顔かんぶりを拵こしらへ門戸にかけて毒氣をさけらるるといふ本朝元三大師の御影をかける如

去

鵺鶻舌 鵺を零陵記に鵺鶻一名飼小五月五日に其舌の尖を去れば鳥物をひ戸あぎとをうるること鸚鵡に過ぎず

朋 殺身や粽てたく

巢 巢

そねえの尾湖や

けりのあがりめと百官に

賜へるに漢書に出ず

競 立競

渡 船車 水馬 屈原汨羅に

入て失なれをすく

心にて今日競渡のたぐひを

なを船のかろく早きを

水馬ともいひ越人船を

車といひ楫を馬といふ

賀端午文 左に人讀即漢文

端午之

午一日

日月之交 午

堪 歡 賞

祝規

史

粽 一折 角例 逸 以

不顧不腆 薄絺

楚粽

之 絶 以 朱 久 知 納

敢 献 奠 而

以 番 い ろ ま ぜ

蟹 之 奉 蟹 蟹

尺牘　上中下昏晷

午日祝規（中）天中佳節（上）端午之定秩（下）五綵糸節浴蘭節正届堪歡賞（上）多壽万福（中）壽詞何盡更欣躍（下）多快欣々多々更不顧不腆（上）不憚輕儀（中）不羞菲薄（下）無論鄙品薄締輕帷單衣

楚粽角粽黍粽菰葉粽従例（上）謹因舊規以奉献（中）逐儀例献納（下）菲儀以投希笑云々冀笑存鑒我芹曝○惟鑒納為幸○請願留

（狀）同報答　左りの尺牘漢文くり

洗俗好史嫡子〻為佳兒辱使傳蒲節之詩辰兄事之他者一杯焼酒遂り鮮美吉嘉魚以結様々焼人形多為洗衣錦焼莊嚴偶人與賢童ち恐情〻所赤者久美納蒙簡厚貺記仕い行紙者〻礼〻述〻拜謝期多恩

尺牘　上中下昏晷

辱使来使傳命（中）勞貴介蒙使命（上）恭承顧命傳蒲節（上）賀端陽之辰（中）祝

綵繅佳節（下）告令辰（送歯）美云々（上）錦鱗下賜（中）珍魚芳惠（下）惠嘉魚錦塊莊麗（上）王飾奇偶（中）綺羅金人與竪童附小子○授豚児蒙箇厚貺屢賜數品・更授多儀・叨蒙分惠拜謝三々對使稱喜相逢以謝之・拜受無顔輙待異日

妙治眼病

絳の袋に栢榔の花を盛て今日眼を洗ひそのまゝ是を棄るとてゝゝゝゝゝ汝我病を代まゝゝゝ唱べゝゝ治をゝ事妙なりゝ養生雜記にをるせり

治淋病

菖蒲根を取細末してたゝるゝ置阿膠〳〵等分合して用ゆ兩三度用ひて治ゝゝ

今日鯉の枕骨と黒燒にしてゝゝゝゝゝ久ゝ止りやまるゝ

痢病にあてゝ其効神のごゝゝ

不病痢病

今日へびいちごを取朝露にあて置一ツ水にそ呑べそのゝ年痢病いろゝ流行てもうゝゝ

ぬゝと妙ゝ

衣服虫ぬかる法

今日菖の葉をゝゝて櫃簾の中に入置べしものづゝゝ虫を生ぜざるなり

蠅のわざわひ呪

白紙のつゝゝ蠅ぐのゝゝゝゝゝ

蓆の下へ放置けば蚤長くこゝを去らず

蚊を辟る咒 今日午刻儀方の二字を書て家内の柱ゆかうらゝなどに粘ば蚊をさる又酒を篠の葉にそゝぎて座の四方の隅小掃せば蚊こゝを其篠をすゞりとゆるゝ

又法 今日午刻燈心を油の内へ浸し日輪をむかひて天上の金鶏蚊子腦髓の液を喫ると右の咒文を七返唱へ念し終りて太陽の氣を吸て燈心の上を息を吹さ夜分この燈心を火を点ればこれ蚊らくを去る

又法 今日浮萍を陰乾にして細末にし樟腦を加へて拌ぜ彈子の大さに丸にして毎晩の蚊ゆり火にして林火ば家内の蚊らくを水とる

物覚なき人は物忘れさせぬ法 今日鼈の爪を衣服の領の中へ入置ば物忘しやむ

夫婦中悪きを和順ふする術

今日鳴鳩の足ぬけ骨をとりて絳の袋へ入男は左の手女は右の手へ付置ば〳〵又常々袂へ入そゝれば

京

賀茂競馬（きそ）ひ馬。赤方黒方にて左右よつがひて馬〳〵べをるなり

（俳）けいるる人やあらぬ是貴

（狂）一つさゝふかゆ なるゝ〳〵べる

もくさもあり 今後又貝桜

へ小勝れ森祭。（けい）馬あり此祭の古実。鎧甲の下よ記を

大坂

（生玉や玉造馬 ○天王寺大字）

堂法事 日の刻 音楽

大和

天神祭 近江関明

神祭○三井寺南院祭 神輿出御

○大津高山寺貴船祭

六日

六日菖蒲

（家）夫木 衣笠内大臣

あやめぐさ こむく人もとゝ

（俳）六日ふい菖の新 入菖蒲小悟

七日　京（今宮祭　御出）　八日　山城（宇治祭り）

中申日　陸奥（相馬中村野寺妙現大祭）　十三日　不成就日

栽竹（竹迷日）と龍生の節又竹醉日とも　今日竹を移し植えば能活て繁茂とぞいふ　其角

（俳）雨雲を竹に醉人目の人後ぞ

播磨（室明神祭）　十五日　京（今宮祭　紫野にて）

是と執行と下松と云所御旅所へ昔八九日ホ有しと　江戸　目黒

不動　地主早尾大権現神事　和泉（堺天神祭）　京

永観堂大般若轉讀　大坂（天王寺）

○白萬遍念珠出る

寺大般若午刻　丹後（九世戸の龍燈正五九月）　十七日　大

坂（天王寺金堂　十八日　京（今宮御輿洗○

上御霊　廿一日　不成就日　大坂（天王寺大般若　廿二日

子堂法事　廿三日　京（清水田村麿忌　近

音楽午刻

江（坂本功社祭）　廿五日　有無日（村上天皇

の御國忌ゆゑ今日禁裏ホ政事なし然ども共急用あれば行

なし　今日ハ有無と云　江戸（揚弓結界惣會）　廿八日　虎

涙雨　今日曾我祐成討死する日なり其妻虎愁傷せ

しゆへ今日ふる雨を虎が涙と云

（俳）しは中ふへばそるいはる虎が雨　紅葉

（狂）然ぬの刺ぬきとるげさ尼ゐるる　日本武尼虎ハ色をもわれまず　未得

京（ト京中道寺祭）　江戸（芝居曾我

○新住吉祭

祭　江戸初芝居はじめて曾我物語をまろ火此報恩ニ今日法

樂の哥舞妓をとろうり○白銀
路鷺れ森神明祭○目黒不動
祭○藥研堀不動祭

大坂

住吉御田植　今日堺

乳守の遊女御田をうゆる事む
ゝ宮女悪瘡の愁ありて宮中
と出て乳守ゝさゝゆゝ此病を住
吉の神さいのゝあるあゝつさ神詫
して諸人ゝ面をさゝしいゝ〜さゝ
さゝゆゝすべ〜〜とへよりて去りの
女ゝまゝしゝゝ瘡たゝゝゝゝ田をうへゝゝふ悪
てゝゝゝゝ乳守の遊女ゝも田植女
とゝゝのゝさゝゝゝゝゝゝゝゝ

(参)大宋住吉社苗　家隆

ふ苗とゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝふ
神ゝ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

(排)々ゝ風ゝ田ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

伊勢

山田御田扇。宮司ゝう扇を出〜てゝ〜に乗ゝ
常の扇ゝゝ少〜大ゝゝゝ内宮の
扇ゝ骨七本外宮の扇の骨ゝ六
本檜ゝそつゝゝ松の画ゝゝゝゝ悪
比須の鯛とつゝ上ゝゝ墨繪の板
行ゝゝゝ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ゝゝゝ此扇ゝ持て舞ゝゝゝゝゝ
御師ゝゝ遠近の諸旦家へ送
らゝ恒例ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

晦日

京

祇園神輿洗。ことひゝ
ゝ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ゝ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一基四条宮川のゝと
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

和泉

堺ゝ道明神祭

月令

此部は五月一ヶ月日の定まりごとの事をあつめ

最勝講 東大寺。奥福寺。延暦寺。園城寺の僧を講師として清涼殿ふ講ぜらるる　内大臣

㊀年中行司

百姓や民の月の四時を考へくらいのろいのりも家君のゝ光

つまゝく草ふ御講の**賑給**是爐とあるも此事ゝ事ゝ

そゝ〜き民ふ米塩などを給ふ事ゝ　嗣長朝臣

㊀年中行司

河おれい民の孝養をりゝさとくゝの養を君やくらん

富士垢離 来月上旬より七月に至りて登山を尤百日浴水潔齋をこの俗ゝ江州の人は七日精進して登るゝ

伊勢 内宮外宮御田植はさりなゝ大神事に

て長宜車をいでゝ規式をゝ多し

瀑布

△生布　△半さし　△木平　夏の部に

△麻布　△布さし　△木木

そゝ〜ぶ雑ゝ布しとしてかくも雑ゝ　仲正

㊀夫木

むらけさの畑のかたこの卯の花や

晴がさゝ〜せるよ作り乃布

晒賣 打々ノ曝布　俳　横町へ売りハ曝布麦風玉

半夏生 五月中よりして十一日めより此ころ

半夏生ぞるを以て農家は日の前後を考へて物を蒔ゝ

大原ぶ 丹波國大原の社へ桑詣をすると云三月廿三日桑詣をすると春さゝと云九月廿九三日桑詣をすると秋さゝと云

絺 薄物　單物

せゝぶ花 古代帷子

の染色といふ寛正六年慈照院殿大追物御見物の時射手の装束つゞき花の白帷子を着るこゝろ是を以て考まゐ染色とも定め難し其外故実

(狂)　ゑをとて人つゝ帳ゑ吹ゐ名ハ
ひゝとゝとゝそゝゐ染ゝふ　久清

(俳)　米まく蘭ゝ
咲やつゞき花白枝　**單羽織**　薄羽織

(俳)　のゝゝゝ風とあすゝ薄羽織玉芝
ゝゝふゝゝむ一ゑ袖も浮世ゝ其角

時令

此部ハ五月の時候かゝる事とあつむ

五月雨

さつきあめ　梅雨　黄梅雨　黴雨
さみだれ

クダルの畧ゝ
ゝとれやらぬゝ

(万)　新古今
玉洋の乃彩人のこゝろ
人ゝへとゝゝ
家集　河五月雨　信実

藤原定家朝臣

五月雨ふやそゝ
ゝゝゝゝ
家集　山家五月雨　雅有
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
続古　海辺五月雨　家隆
ゝゝゝ塩汲ゝゝ海士人の
神ゝゝゝゝ　仲綱
千載
ゝゝゝゝゝゝの末に秋ゝて
ゝる塩ゝけ乃波の浮ゝゝ
御集　江五月雨　後九条内大臣
五月雨ゝ久ゝゝ
ゝゝゝゝのゝゝ
夫木　五月雨有餘　右衛門
五月雨の
ゝゝゝ

つるかさかるやこの形のやもとやこ
るきくこれまるれ五月そのそくざ。五月の
糸同人のそくぶき。うらまめ
る。五月五人もこひこころ。

連 五月五日菖蒲のかれ橘乃宿 宗春
五月あいこの乃ゆ河毛うる紙巴

俳 五月あやそくいいあるあ貞佐
こ後や梅雨ふるひ五月五月 五 其角

狂 五月五日陸こあれて乱ぶさう
からくやの好くひくなる満水

五月闇 俳 作系や新の玉
あくさつき園 我白

詩 五月閏五字對句 同上

海霧連南極 蓮渚千峰静
江雲暗北津 梅天一雨清

詩 五月闇七字對句 詩礎

帆開青草湖中去 夏亦寒
冬

衣潤黄梅雨裏行 連雨来
驚風乱颯芙蓉水 五月寒
窓雨斜侵薜荔墻 已生霓

白さ人 つゆのうち小雨降ぶ前
々晴ん人ことろ所き有と云

黒さ人 空かさこ曇て今も降ぬ
きの内ま又晴る所と有と云

草木

此部ま五月一ケ月の
人さ木の類とのつひ

夫木

かりうあ人屋のあ人ちれむ
あや丸の形をすろ夕ゑ

糎花

雲見草。苦揀。○俗ホ云
梅擅 ミ正字棟ま

恵良

秀 新古今

あ人ち咲ま面の本張ま高て
五月雨ろ人風ろ人ろ

家隆

詞 かやうにうつくしき花なり。家の外面ふかみどりなるとよむ。紫雲ふまどん。吹風ふかぬる。うるさきのあらしうそ。つまあつ庭。美よ。ふ地。ぬ色。夕日紅。ぬれぬ庭。雲花。みやこ。加茂。小弥。

連 橘かをるあつ。ぬ雲。あつ。宗春 あつ。咲む。の精や。の枝 紅色

山梔子花

木瓜 桃

詞 いとあつ。ぬ。いとど。梅の。新撰 筑波

連 ぬ。の。ぬ。のあつ。立。元隣

俳 ぬ。ぬ。ぬ。

カヤウナケシキハ思イガケナキコトノヤウニオモワレトナリ 艶妖宜小院修短

稱低廉 ヨクウツル ナガイエダモミナ イエダモトクイカキニトリ ヒヨクイテアル

女貞 ○良木△鼠ガラミ花 五月 白花開く葉い

椿小似てきごとく故ニ姫つばきと又いやぶ椿と云 葉つゝ四月草木ハ出モミツ四月草木ハ出モミツ

黐樹 四五月の頃白花を開く 葉い女貞小似てうるおく

光あり四時凋まず只二三分落葉す 三月図繪此木の皮を取て

夫木 君ちとせ岩の形ばかりの樹ノかゝるいとなれば

南天花 南天燭。南燭。男燭。深菽。楊燭。牛筋

栗花 花黄黄ノ 照んとて養ひつく栗の花 扇竹

防盜賊法 戸の尻さし木に栗を用ゆへ盗賊入らず

杜鵑花 さつき種類多し其中八木として賞する

の松ちゝ。久ん下。さろま紅。○の雪。神楽岡。少ゝ。かゝ。人丸等へ

△五月蠅燭とも書く今ハさゝ

ばりいふ 名 石巖花 花天ニ比ス

合歓花 合昏。夜合。青裳。朋蔓

○花上へ半白く下半紅なり葉い緑ゆて夜い合す 祥ゝ如き

により祥ゝの木の中畧なり

○人家ふうへて人をして怒らさらしむ合歓い怒りを除き萱草い愁を忘るゝ○黒丸子の主菜なり 万葉 紀女郎

ひるいさゝよるいとひめる孫むの花

君のゝみんやうけさへふらん

負應二年百首 為家

秋といへるは秋あり秋ふむ
神〜まつりはこれをもる月うれ

(俳)俗に多用ひ用ひ　榊花　今の世に用ゆる
榊を神のもの治德

さうれよい花ありて色々説あり○三才圖會ふい榊を
坂樹とかく花い白く少きを実ども生い青く熟れ紅　百合
強瞿。重箱　(万)夫木　西行
重ね雀上るあ田まる姫ゆりの
何よつくるもるさ我ゆうる

(詞)夏の野。庭の面。ちりけふ
さける。あ〜田まおうつ
(連)ほよかくぬをうさと花ひさゆる弧宿

車百合　車の輪のごとく花ひ
らまれかうう横ふ垂る

日光の産い黄いろ　姫百
大峯より出るの赤

合

山丹。百合ゆ似て
花も葉も小〜

葉〜柳ふ似ゆう花赤〜

(万)夫木　土御門院
庭の面ひ去さ人さくる芳ひ日よ
ひゆう雨ありた姫百合乃ゆ花

(連)をうて乃ゆ雨姫百合ひさふ宗牧
(狂)深草ふ咲ます乃ゆ姫ゆりい
小野〜小町の井と
まであろ　花楽

開花ふさ〜愛を
べ〜江戸より出ず

赤花び〜厚〜薄　袂山丹
きりのと緋百合〜云

白く葩厚く本琉球より来
る深山の間繩ふもがりて見を
取得て袂ゆ入れて
帰る依て此名あり　鬼百合

巻丹。花赤く六弁く
黒点あり山丹より大きく

(狂)諸匂ちふ人食ひとやうぞかん
ちふかさよ　鬼百合の花　教二

俳 鬼ゆりの名もいとゞ立甫

糸百合 狂 絲撈

舌とゞりゝ露五〇百合山丹巻丹ハ一類三種あり此種数品ふるりて透明百合博多百合黒百合紅葉百合紅百合其外

紫陽花

一名ハ四ひらの花〇花葉もてるりに似る唐の白楽天初て紫陽と名づくる云

公朝

夫木

元極と人いふ川かみとさかつてきるあぢさゐの花

詞 よひらの花ハ手まさく

俳 栄花物語 ぶや栄枕 蘭

紅花

紅藍花 黄藍 呉藍 呉藍 末摘花 紅の花 連水

一名ハ紅藍花 ○漢張騫ちゝめて種を天竺より得て帰る本朝へ傳ふ

異より種を得たり○中れ日種を伊勢せばうく茂盛をとゝのう羽州最上まさハ山形の産を良とし伊賀筑後ふれふつゝ豫州今治甘ゝび摂州播磨を其次とす

為家

新撰六帖

紅の末さくゝ色ハ

連 ちゝびを末つゝ

俳 世嫁ぞ畑よ矣良紅の花

天門冬花

一名くさとをしたゝ

金花。萬年松。商陸。海濱に生ずる物あり葉ハ杉の如く和らゝ

俳 天門冬うき世を秋の虫くと 小春

蜀葵

花五六十種あり色数品花形千辨〇五月下旬花咲下より上へ咲のぶり開き盡る時ハ梅雨の終りなり大底ちゝ

錦

△葵 花の大さ錢の大さなり 白赤二種あり開くこと久し

△龍葵 葵葉のごとし小似なり 実は茄子なり

似たり其始青く熟する時黑く或は熟して赤き物を龍珠と云へり

△萱艸花 忘憂鹿 鈴いとみ

黄赤。百合に似たり 夫木 為相

下紐を結ぶとなくなる人の恋ぞ

(俳)忘草に佐多男を表す 荷兮

萱艸の花と身やあるまた苔の 来山

(詩)萱艸之詞 唐 李咸用

芳艸比君子 詩経ニ見ハタリ 詩人

情有由 是ハヨシアルコトヲ 紙應憐雅態

未必鮮忘憂 花葉ノ風流温雅ナルヲ愛シテ憂ヲ忘ルヽトニハ鮮スルニハオヨバヌヲ

微風鮮砌柔 雨ツヾキニテ萩草シダリハヘ風ソヨキテコケモ砌ハニ柔滑ナリ

莫言開太晚猶勝菊花秋 花ノ晩キヲ怨ロメ玉フナ菊花ハ秋ノ末ニヒラクソレカラ見レバ早シトナリ

積雨荻庭小

下毛花 繡線菊 ぶどうの葉に似て小さ

花をらゝく淡赤色あり

金盞草 花黄白さもあり

金錢花 花紅みごとく

金銀花 忍冬の花に黄白交咲く故に名つく

(俳)金銀花ちれば白くたゝふるし地うる利貞

夏菊 種類中多異名秋菊の一時ふあり

(連)夏菊は仏会いさ菜の移宗節

茴香 色薄黄

花日の内ふくらかるく是ふくて時計の名あり

威靈仙 花淡紫 鼠李 鳥巣子 牛李

美容柳 金絲桃 未央柳

花黄 ゆり

治積痞法 九州大禄の諸士平素積を憂へ死ふ至り其子ふ遺ぞくして死せば腹をさき積を見て何ものゝ相てさする是を見よ命を子遺命をだしがくよる訴へ腹をさく果して積塊あり甚さかく利刀くへも刺こくあさるど種種の菜物を以てそなげ共うゆ変ぜど其中一人楊枝をもつて仮初よさす其でしたがちふとを見るは是びつう柳こそ作る楊枝へ

故ふ石柳の葉を煎じそそぎ〜其積塊たちまち消滅と云り

酢漿草花 一名酸母。片葉三ツある故かさねそこふ

蛇床子 異名 墻蘼。蛇米。蛇粟。地牀。馬牀。花白く横〜さ〜蛇喜んで此草の下ふ訓し其実を食ふゆへふ名つを

蕺菜花 異名 菹菜。魚腥草 花四葉にて白葉腥

草石蠶 異名 甘露子。土蛹。滴露。地瓜児。五月根を堀て蒸〜煮て食ふ味百合のごく〜根老蠶のごと故名づく

接藝花 ○ゑびついぞう。○本草綱目云其ハ莖蔓ふ似て強く刺あり葉馬乃蹄のごとくして光沢あり秋黄ゑる花をひ〜くくいろう。○俳諧の季ふハ古来より夏〜する故爰ふ出す

△天南星花 一名虎掌。和名おほはそみ

△苔花 一名地衣草。淋雨の時花の形のごとくなる物と生ずと是を苔の花とつかふなり

種類 ○石蕊 かさちは花をべのごとく ○井中苔 ふるき井の中に生ず ○垣衣 ふれる垣の北陰に生ずるものなり又石上に生ずるものと昔邪と名づく一名烏韭又屋上に生ずる者と屋遊又瓦松一名昨菓何草しいへ○玉柏 石ふ生ずるかさち松のごとく紫色なり

△朝菊 四月五月

の内紫碧色の花をひらく朝開き暮ふさむ故に名づく

△蹠豆引 一名胡豆○胡戒又翹揺○花の形蛾のごとく其莢上に向ふ故に名づくひくくれば收取るなり

△蠶豆引

△花旦見 菰のごとくへの花さく

(ニ) 万葉 あさかほ さくさくさらふおもふこと

うるさかつても忘れぬ恋もするもの

△花菖蒲 花葉かつらの紫白飛入種々あり

△菖蒲 軒にふけるものの泥菖蒲なり石菖蒲に小葉なり盆中ふうへて愛す

尾〜奇なるいつまでも泥〜ことあり

やめとよめり菜とする石菖の根なり根の長さ尺賞して長さ

根とよめり委〜くは九丁目に有

(ニ) 年中行事

みきのみをのためとあくめ菖

ひつけつきもかのこ川らん

経賢僧都

家集 雨中菖蒲 法性寺入道

雨ふまいを玉とそこうるあや絶菖

さと人菜よをとるおれ雨ふ

白川殿 雅言

菖蒲

ふりの彩ぬきのふめるれば

あや色もワろめるみだれ

草庵　水辺菖蒲　頓阿

をみいる紙かりゝ新の新しいて
あるをそ志ける屋の池あ

江戸菖蒲　就な
進上　水邊菖蒲
千年五月五日大江海武
皆人よゝこ得ゝ師頼卿よ
まれ久るゝ
ゝ

詞　沢あ池のあやめ　風かほる。
みどりすゞしく　さゝぎり　あへいそ
よゝせ年ふ　おそ　光の
櫻を　ふゝ　ゝ　郭公のあやめ
の根　ゝ　ゝ　沢
小舟　菖蒲池　川　生国
△菖蒲つゝ　ゝ　ゝ

連　かり　牡丹花
人　小家　紅巴

俳　ゝ　ゝ　ゝ　十ナ
ゝ　ゝ　ゝ　嵐　其角

狂　皆人のこゝろ　ふゝ　ゝ　ゝ
ゝ　沢　ゝ　水　ゝ　常楽寺
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

朝露草　銀錢花　ゝ　ゝ　ゝ

底黒紅のゝ　ゝ　ゝ　葉三出五出
ゝ　西瓜の葉ふ似ゝ　高さ
二尺ゝ　枝　朝ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

長根草　江蒲草　石龍芮

穂のゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
小花ゝ

蚊帳釣草　茨草

木の類ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　三ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

萍花　出る春ゝ

夫木　為家

又こゝに住こゝやとるゝ山陰の
秀りまに出る中川のあ
(能)うた枕やあさい
あちこち春の咲こゝ曲 藻花 馬藻

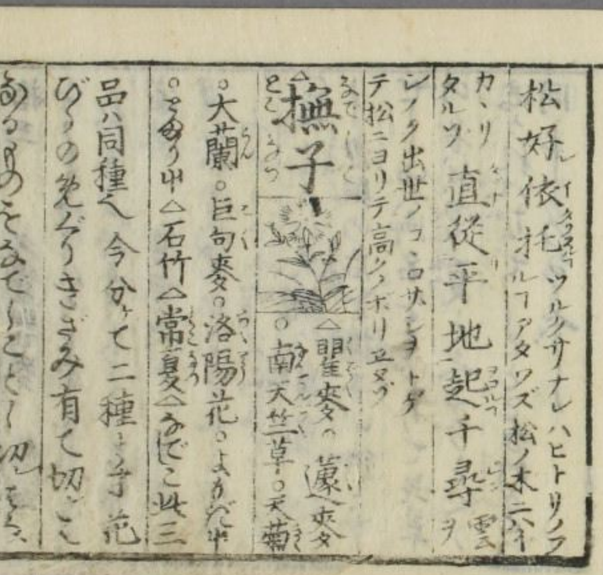
水蘊。△藻と書る△藻川舟 貫之

(哥)夫木
いつかも今日と言るして花の
おりてよくゝ玉をとゞうん

(連)花ふ花わ〳〵ゝ出る玉藻川紹巴
(能)池をかさ〳〵風のもれむ堂 嵐雪

二月 苗富根より生ず
四五月花咲くあり 故名づく

(詩)鉄線花之詞 賈昌期
披雲似有凌雲志 志アルヤウニ見ヘルゾ 向日寧無捧日心 日ニムカイテ花ノフカヘウヤマフテノ心デアラウ 珍重青



松好依托 ツルノサナレハヒトリノフカ、リタルヲ 直從平地起千尋 雲シラク出世ノコヽロサシテ松ニヨリテ高クオ

撫子

△蟹麥の蘭 ○南天竹草 ○天菊 ○大蘭 ○巨句麥 ○洛陽花 ○よろ〳〵草 ○ゆり草 △石竹 △常夏 △なでこ此三品ハ同種ゝ 今分て二種ゝ子花 ○葉ヨ用る蟹麥 ○ゆり草 ○なでこ 或ハのぜたちくとゝ ○ゆりの花色 薄紅ゆり △倭撫子 葉ゆり ○ゆく花紅紫白單 葉千葉 ゆり △藤撫子 葉ふゝく葉 ○ゆれちゝく 負拾梗ヨ似て白 紫ヲ帯ス ○阿蘭陀石竹 葉珠 ふゝく葉こいく花ヨ又をゞんて

大輪なり。○京撫子株ふく花一
わちく葉也とより大きく花一
重紅なり其外数十品あり

㊀ 家集　俊頼

君が代のたぐひよひん春日野へ
いつれ年にもそ花さかれみけり

久安百首　俊成

庭の面の苔地乃上のかつみき
ちとよりちけるとこるのあれ

拾玉　久愛瞿麥　慈鎮

ふるこけのうれめ名ホ垂ホを
船なるめぬふうらさこいばく

家集　瞿麥夾水　仲正

夏草のしの水ふるあ〜れて
ふさうくふ咲大和なてこ

○接だるに大鏡の裏書ふむ
〜深殿の后を撫子の御と申
せしゆへ御名をそりて此草
の名は常夏とそうとあり
ちられバなでしこ
同じものなるべし

詞　咲旬ちるさかり。ちるく。
はなれ。垣根日ゆけ名ちるく。きけみが中。
咲ちる。蕊の床しいふうちう
とよむべし。ちり初ふなも
よむなし。妹いはく我ありと
こゆのあしよりあり。紅を
かゝれる井。日ケしのなく。
大和なでしこ。あなし
ことはるはしをくあ かさるて
しこ。おはしこ。ちこはけるあ
とあるし 鬱 とこのかれちう
大和撫子かゝ撫子なでし 宮和撫子なでし
そう 家 つるあらこやこ 古尺。金表。さ
ちくこと。黄蝶。かつ〜なでしこ。さなき
なでしこ。ふしなでしこ。
㊀ 撫子は和名抄白花 宋祇 如の家 宋祇
〜〜〜

(狂)かそろそ田人あ〜い新ゆ〜の
あ〜ら〜人よるで　このそろる行風
明ぶ立り衣見ら　ちやくなと　この
暮ら〜しくと　ゆ　あるわはゆ　仝

(詩)　瞿麥之詞　唐　司空曙

一自幽山別相逢此寺中
ヘカタ幽山ニテ見テカラヘタ　花ヲ見ルヴ　高低
此寺デオホクノ花ヲ見ルヴ
俱出巢深淺不分叢イツクモオナジコト
野蝶難爭白庭榴暗讓
紅白キ花紅ノ花外ノモノガ及バヌ見ゴトナヴ　誰憐芳
草色春露到秋風花ノウツクシキヲ草色スルコトバナリ

田植　早苗取。苗の長サ七八すの時うる。植るとつゝ又
早苗ゝる〜もゝつゝ
(俳)会羽忌て友と多くき四人分其角

早乙女　女の苗を植る云(俳)早乙女
のよくれ久新い朔斗其角

田歌　苗とる時声をあげ歌ふ
(連)声の色も麦苗ふ風ふ　柏
摘ゝ比い里ハ門さへ田ゝ　紹巴
(俳)ゆし女の声い止ゝ　都公　梅侯

田草取　苗とる。十四五日ゝ
(句)かりゝ　れい上ゝい
見えされくも草の根土中ゝえび
らゝ早く茂ゝ　草の根えびう
そく　草ゝ草の根
苗とゝ取ゝる十四五日以て草と
苗ゝ　ゝ草ゝ草ゝ
(拾)拱後やそまゝ　ゝるゝと
報鋤ゝ　ゝ草ゝ
(句)新撰六帖　知家
ちゝのとゝ志ゝる稲ゝ
(俳)ゝ志ゝ田ゝ竹戸

早苗　若苗　玉苗。初なへ
。ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
。四月ゝ五月ゝ苗ゝ
日程ゝ八九ゝ　ゝ成ゝ

(家) 夫木　　人丸

あととりいれし面の小田ふ社めしてはるのつ苗とりつづくくうり

家集　取早苗聞郭公　　西行

かくくさす戸の内女のとやされて山田のさなるへいとものそぐとる

兼久五十首　早苗多　　定家

うへくすなりのさなるへ星ごゝ舟ゆくこのさとさのかどもこゝう

夫木　採早苗　　為家

そやまくふさつきもまう苗そそこ公こ苗のワるへ共ぞもあしく

寛元奇合　社邊早苗　　知家

このさとりれたこのすろくそもひけそかくへのさるへとうそしむん

建保奇合　夕早苗　　範宗

とりはべのやまさのそくはかいさるへとうこそそれらでめりれ

家集　雨後早苗　　仲正

春久ろあめはなごりはうるる田ハこゝまあさくぞそまぐれこへくる

常盤井百首　門田早苗　　仲正

かすとりるみろこのとこるいわるよろこいそのそこれさるるへくる見よ

(詞) 裾形く小田。苗代縄。ゆまそへ神。小山田。懐。苗。谷川。ゆまそれ。苗代。ゆまそへ水。

小町田。旅の男。水川。青田

(連) 早苗とる。ゆりは民のこやまは宗祇

これは又この美濃の田ちるる宗春

(能) よとるせいの風ぞるよ苗少　芭蕉

さゝ一筋ゆやつは世ごのよ苗小　十丈

(狂) よこ女は男ゆ打つくうつくの

地ゆへ系いとる早苗ゆ郎　宗恒

菱花

六月菱の異名　一く記を故菱に暑ス

若竹

今年竹。新竹。竹苗。竹い諸草の内

長く高く故に多詩と名づく又

世君とも云 (家) 夫木

世若く新そそへ竹の

今代のちぐや今のそ新竹

(連)花さく竹ふもつゝむ春の雨　宗祇

(俳)若竹や鞍ふりぬる若桜　其角

〔若竹や雪の重さにすぐるべし　乙由〕

〔若弁のうゝふたたび雀なる　亀洞〕

○竹をうゆる竹酢日かゝる

正月朔日二月二日十二月十二日かゝる

うゆべし　雨後うゆるは活し　安し

○信濃かゝ竹をしあれども篠の竹のこ

ろう　正月かゝ松ぐろう　竹

立て竹いかざしす

細長く節ひくくして　業平竹

直なり矢竹ふ用ゆ

雄竹の如く節ハ雌竹ふ似ようう

女竹男竹の見分るさゆ業平と云

観音竹 葉短くはくは　志ゝ竹

かゝ竹　太きかゝ竹

如し　**布袋竹** 節ぬきぬ

て作り

竹のこ　**竹の皮散** 季に

用ひきゝ淡竹の皮しるい

六月の季ゝ　竹の皮　いらふ

艾 異名 冰臺　黄草　醫草

白蒿　艾刈

もりしてい季ゝ

(俗)艾の中ハ麻ハ弦なくゝ

ゝ公の中ハ蓋ゝ　時頼

○俗蓬の字を書く蓬ハ惣名

種類多ゝ千年艾　草花蒿　白蒿　角蒿

真菰刈 異名 菰草　蔣草

○古代俵ハ作る今稲藁ゝ

作る物をもとゝ斗ハ雑ゝ

真ハ必ゝる詞ゝ

○今ハまさゝすくるのゝ　○奥

州ハむゝ菖蒲ゝ　端午ハ

ゝれを軒ハ菖蒲ゝ

(俗)古今

真菰ゝる淀の沢ゝ雨降ゝ　貫之

はるよりこそはまさるけれ 云

俳 枕日記云孫いあれやしかも素

石菖 俳 石高のゆふぐれ

白ふ泉こう飛ノ移竹

和布刈 正字石蓴○紀州

加田ヨリ出るとかぐろ

よりふ又ふるの類なり 海帶刈 名い

とかえの對ふようて名づく

るゆう刈ハ切りるなり

李子子 異名 嘉慶子。明李。来禽。

居陵迦。沈朱實

詩 李之詞 唐 李嶠

潘岳閑居賦 潘岳字ハ安仁ト

イフ此故事文選ニ

アリ漢ノ代ノ人ナリ 王戎戲陌辰 王戎ガ事下ノ

故事ナリ 蝶遊芳徑馥 芳徑ハ花ノ咲ク徑

バタカウバシク匂フナリ 鶯囀弱枝新 弱枝ハカヨハキ

枝ナリ 葉暗青房晚 青房ハフサナリノ李

ノ実コノトキ葉ハレゲリ下スナリ 花明玉井春

李花ハスクレテ鮮明レテ透徹ルナリ 有靈知

幹 李樹ノミキニハ神

灵ノキハメテアリ 時用表眞

人 ソレユヘ李ヲ神仙ノ

一人ニタトヘタリ

李故事 傍右 晉ノ王戎七歳ノ時

李ノ樹ノ下ニテ撥フ李子ノ多

キヲ見テ枝ヲ折ル小児競ヒ走リ

我先ニト拾ヒ取ル中ニ王戎バカリ

取ラントモセズ人ノ故ヲ問フ王戎

ガ云ク路傍ニアル李ニテ人モ取

ズシテ然モ子ノ多ナルハ必ズ苦キ

李ニテアラン此故ニ我ハ取ラズト

答フ果シテソノ李苦クシテ

モ食レザリシトト 龍血 李ノ肉

世説ニ見ヘタリ 厚フシ

テ核ノナキハ龍ノ耳ヲ割ル

其血ノ落タル所ニ李ヲ生スルト

イヘリ

鑽核 王安豊好李子ノ木ヲ持テ價貴ク賣ル

他人ノ種ヲ植ン事ヲオソレテコトゴトクノ核ヲ鑽タリトヘ

李接法 桃木ふとくの枝とはゆむ実くれるぬみてあはし

楊梅 異名 杌子。聖僧。やまもり

紅白紫の三種あり泉州大義ヨ生そろりの尤佳ありの長ハ紹の長永戎

俳 ゆるりふ出つる実ハ紹の長永戎

詩 楊梅五字對句

冬ハ橘ノ実ヲ花ニタトヘテトリレゾ

冬ハトリロキ花採盧橘

夏ハコノヤモニレク物ナキヨツテツミトルトリ

夏菓摘楊梅

詩 仝七字對句

詩礎

櫻閣兩山搖碧落

嬌暮春

クモマメニツヤニタカトヽアタリ

楊梅千磵瀉紅泉

一庭花

オホクノタニガハアカイヤモヽ

高林帶雨楊梅熟

故園春

ヤマモノハヤアメニウルホフ

山岸籠雲謝豹啼

帶雨閑

サンガンコメテモヒヤウナウ

クモノムラクトタツヤヽケニキニ

詩 楊梅之詞

唐 李嶠

折来鶴頂紅猶湿

楊梅ハヨクヨ天崖ノ

丹頂ニエ似タリ

剖破龍睛血未乾

神竜ノヒトミニモタトヘタリ

味

若使太真知此

楊貴妃ガ此楊梅ノ美味ヲ知ルナラバ

得到長安荔枝馬

荔枝ハ長安ノミヤヽニ到着スル事ハアルヽジ

仏教技揚梅ヨク似タリヤヽモヽヲ荔ニテ詩ニ云ヘリ

氣條桃

をくのうれをを根ヨ実多く大いヽ

無花果

映日菓。優曇華花をくくして実ある

初青ヽ熟もれバ紫黒色味甘淡〜〇涅槃経ヨ云く佛出世

い烏曇花と喩へて稀なる事
いつゝ即この無花菓の事なり一
千年ふて一度花を開くといふの
い妄誕なり（玄）玄椿えとみぐく
君の代は百回り咲
優曇華の花乃ごとくなる

天仙菓

和州山中ふあり花なくして実
をむすぶ枇杷に似て小ぶゝ小
児好んで食ふ

枇杷（能）颯この歌なり
枇杷はてくる

光廣卿

主毋虫ふ刺まとる治法

刺きていつくみ志のびがくれのも
て枇杷の核を甜ぶてくれを
はくきでいくみ頻ふ治す

（詩）枇杷五字對句

楊柳枝々弱　嫋々碧海風
枇杷樹々香　濛々緑枝香

（詩）仝七字對句

詩礎

回看桃李都無色　對春溪
喚得芙蓉不是花　正滿林
万里青障蜀門口　味尚酸
千樹紅花山頂頭　溪水流

青梅

（連）青梅の家分るあけのいろ弘　紹巴
（能）嬢さい家ゞれ梅の一ツくる　社国
（狂）青梅をよめがふはるゞ
くちはくまり　国丸

（詩）青梅之詞

天賜肥脂一抹腮　胭脂ハ紅粉ノコト
盤中磊落笛中哀　落梅
イフ笛ノ曲アリ　雖然未得和羹便

塩毒和羮ノコト 曾興將軍止
書經ニ見ヘタリ

渴来毒酸ノ渴ヲヤメル故事
ナリ將軍ハ曹操ノコト

ヲイ
フグ

羅隱

杏子 甜梅 梅ふつゝ
ハ酸〜根のあさくなるゝ石を根ゝ置て
ゆゝしくなれば実多〜

櫻桃 紅色ゝと朱櫻と紫色
細黄点あるものと紫櫻と
名づく味尤美〜黄ゝと蠟櫻と
いひ薄紅を櫻珠と名づく

○中夏天子ハ舍桃をもつてまつる
事あり礼記ニ出ス 舍桃ハゆをゝ
ひものこと

詩 櫻桃之詞 王維

勅賜百官櫻桃

芙蓉闕下會千官 御殿ニ官人ヲ集メ
會宴アリ
紫禁朱桃出上蘭 禁庭ニテ櫻桃ヲ賜フ

繞是寢園春薦後
非關御苑鳥啣殘
春薦先祖ヲ春ニフルヒリ
春鳥ノヒモロギニテ
御苑鳥クリキノ三八歩
歸鞍競帶青絲籠
退出ノトキ拝領セレ
籠ニ入ヲヘルヲ
中使頻傾赤玉盤
ツレ〜ワケ
飽食不須愁內熱
コヒヲタベレ
ハ內熱ヲヤ
ムキツカ
ヒナ
大官還有鹿漿寒
高位
ノ官人ハアトデヒヤリト
砂糖ヲ用ユルナリ

桑實 正字 青小柚 青く小さ
異 ウリ

薑 紅 こくかみの香りあるに
美味 たくさんくと笑ひ考ふる 唯正

生胡桃 ㊇ 新撰六帖 ものうく北面
ハ胡桃のやうにかくみ
物扱ハ公〜
ものり 光俊

早松茸 五月ニ出るを

て八四五月兩後に生ずると早初と云

俳 風まるやや秋くれ早松寿風冷竹

茄子

異名 崑崙瓜 草鼈甲 俗諺に秋茄子嫁に食はすな

そもそもいつくしいなすびいとうつくしいひはくこへー華うや万葉集

の中れ　しこなのり

宗 秋なすびよりさきはけかこそかつぬ　ぬかよいくれ　棚おそくくるを

俳 おくれより到よ茄子の味ふ芭蕉風鈴軒

狂 このつゝの茄子のもをしひさ紀の

そくこそふはくひ茶入こそ見んくる未得

初茄子

異名 水茄 早く出るものゝ

俳 一日ふ二ッ雲くより初茄子一池

ぬうみをふくまをかくはん瓜茄子　晋子

瓜の花

胡瓜越瓜姫瓜浅瓜胡瓜をべこ花咲

ゑば実の所よくはくくるす

俳 夕ばれも朝ふもはぎ瓜の花芭蕉

ゝこのを出くゝ瓜る人

出れる瓜乃茶支考

早瓜

浅瓜。白瓜。干瓜。青瓜。

宗 夫木　定頼

山城のこゝのいくゝ瓜はくこ

こゝ瓜りとゝくゝ井りそ初る

狂 浅瓜をこゝてくゝ嶋笛も

ひかりくとゝくゝ宗輔

胡瓜

黄瓜 祇園の氏子これ

を食ふ事を忌む愚

ゝくゝいつゝべー瓜の丈い即木瓜

の花は形ゝて織田氏の印ゝ

信長祇園を再興ゝて自己の紋

と社に付られるゝ神社の紋はあり

姫瓜

色白く其きゆへ姫瓜と云

小児畫目と画こ玩具と

ゝも　抗草子ゝ瓜ゝきものゝ

瓜ゝ似ゝゝ児乃ゝゝ云ゝ

狂 姫ゝゝの足ゝ紙ゝゝ

茶かくれゝゝ高乃丸新

粟蒔 旬ふむこそぶい夏こそ
夏粟い三月より
五月まそまく秋粟い六月
下旬より七夕頃までまく

稗蒔 五六月時とさでめ
ごくまくてよくごき
ふるめこそ洪水或い旱損な
くの時苗のあらく作りてうえさえ

秬蒔 四月五月まく迄小き
びい六月ふそまく

胡麻蒔 四月五月雨ふりてあめ
とこのる時まくとよしす

種植 秋大豆 秋小豆 櫻 移
楠 芥菜 蕎豆

栽 菊 椿 梨 **壅土培** 橙 橘
植 蓉

菊 牡丹 芍薬 **挿木** 梅花 芙蓉
これらいとすべ

茶 石榴 櫻 桃 薔薇 山梔子
梅雨の中枝を切て地ふるばよく活す

収採 蓮房 沢瀉 杜仲 麥
葛 菱 蒐 乾漆 藍

生類

此部ハ五月の諸の生りものとしるす

獸狩 〈躾狩〉〈照射〉〈火串〉
狩ハ唐土ハ四季ふかりそ
夏の狩と苗とつふ王者徳茂乃
形ふかりて即獲物い宗廟ふ供
下ハ士庶ハ冬ハ本邦の人ハけりめと会
せどとハいとも夏ハ殊ふ苗と損ぜんと
恐まて是と防ぐ故ふ季こそとるある
ごとく〈ふ狩ハ夏山の狩と云ふ
〈こそ〉〈こそ〉といふい夏のふくこそ
火串といふのふ火をこそ
て山中ふ入まバ鹿その火を
よ目を弓にて射て取ること
いふなり

㊂ 夫木

夕されいとりしたそる狩人ぞ
ゆど冰〈〈くや妹がまつ〈〈ん

小鞭

家集　照射及暁　顕季

[illegible]

(詞)てん。新。光。[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

(連)[illegible]

(俳)[illegible]

(狂)[illegible]

[illegible]

(俳)[illegible]

とのむ[illegible]

鹿子

鹿弾。鹿の子。

白虎

魚簗

立志

打

魚梁に川中に木をうちて網をはりて魚を取此木を打ん

(家)夫木　[illegible]

水雞

種類数多あり此頃あしりの鶏ようの雀ようの[illegible]

淡黄赤色を帯ふむ白く尾短く足長く夜鳴て且ゆ遠く其声人の戸をたくごとし

(家)夫木　為兼

夕月夜卯の花垣もうをそひこのねてふちうくあの鶏ふうう

家集　海辺水雞　中正

里のにわまいるよの沼ふこゑにて

たくくの鶏よ地ようたくとう

拾玉　水雞何方　慈鎮

小夜更て篇も空ゑまたくくく

人まいあしく　あの鶏ようん

亞相　水雞驚眠　雅親

[illegible]

詞　ちたくさ　北ろろ　夜　夜北ろろ　ちたくく　夜とたたく　唱

行やすら　人まつ川のこと　家の戸

樫のこと　月すさ　月すさ　樫すさ　八たく

清月ふ　樫　十二月おあふ　五月　お　樫樫とあり

月今　たくさ　たくさ　樫　月　後ゲ門をこと

美　美北ろろ　月　とれわ　美夜　夜ふ　郭ふ　ろろ

里北　餐　新潮　名月　後　菊の妻　戸

竹田北里

連　ろ　名　月　月　ふ　宗祇

ろ　ふ　ふ　峰　歌　ろ　ろ　ふ　ふ　宗牧

俳　夜　ふ　と　母　祇　ろ　ろ　ふ　ふ　其角

ろ　ろ　そ　声　の　仮　ふ　水　鶏　ふ　楚　耳

狂　ま　や　結　ろ　ろ　ふ　ま　ま　記　ろ　れて

ふ　ね　ま　ろ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　朝　奴

黒鳥　大　く　く　ま　て　黒　く　く　て

ふ　ふ　ぶ　ま　り　味　美　ず

鳥　ま　俗　鴨　く　く　誤　ろ

野　鴨　い　一　名　ろ　ろ

輕鳥子　同上　水鳥　水鳥

古巣　ろ　ひ　ま　い　巣　も　句　ふ　結　ろ

鳥　の　巣　い　春　ろ　ろ　鳴　ま　ま　ま　ま　ま　ま

はぐみて拾ふ有もず　鶺の

とぐろい秋ちかう

巣　萱原の巣　蛆　ふんどのひもう

人目のあり

初蟬　△蟬の初声。此ころ早くなくといへり

(俳)和歌や笛の式を十文字其角　蟬　空蟬　齊女

蟬は五徳のう　頭は緌あり文　露とのむは清く時節をたがへず

鳴は信に黍稷を享さるは廉

とる所巣穴をもとめざるは俊

(秀)新古今　摂政太政大臣

秋ちかき気の変る頃蟬乃

涌のあやはの葉そよぐ

夫木　俊賀法師

夕くれの雲の林よりなくせみの

なくもしられぬ雲のうへ

亀山殿七百首　樹陰蟬　有光朝臣

夏ふかく蔭る木陰ふるくせみの

こゑも涼しき色のゆふ

(詞)明の声すさく。法声林表すこ

ろ。耳ぬるもの。夏山。蝉の

羽衣。声さびく。捐の雲。ならはぬ

松風の声。はるかに。明のくれ。

引歌　まつ風。風風。雨。

まちて　夏の林　夏山。夕日　相撲

(連)木陰の涼しかりしころ　紹巴

(俳)隣りは木蔭ひや蝉のあり　其角

(狂)帆かくれ山ふ人よりや秋園の

このこゑ人よ蝉ぐそうつく　春房

(詩)蝉五字對句　同上

客吟孤嶠月　盤雲雙雀下

蟬噪數枝風　隔水一蟬鳴

(詩)蝉七字對句　詩礎

數家茅屋清溪上　有蟬聲

千樹蟬聲落日中　夕陽中

詩 蟬之詞

垂緌飲清露、世ミハフニノミ流
響出疎桐、木ヨリ出ルゴトシ居高
聲自遠、バトラクキ木ニ居テナホ非是
藉秋風、コレ風ノフクカヨラヌガ

蟬故事

齊女化 齊王の后王を怨るしあくて死す
化して蟬となり樹に登りて鳴く
ゆへに蟬を齊女といふ

飛蛾化蝶 漢の朱異通事舍人となり
後中書郎に除せらるゝ時に飛
蟬有て冠上の集ゆへ蟬の化す

豉虫 ○小さく黒きもの水上を
やうやうもぐるものあり

小鯨 鯨の小さきゆへ鄉虫子 形小さく蚕の如し

水馬 鯉虫 蝪賣ると云池川
よりて尾も頭も尖と黒
赤色あり鯉節に似たり一説
味甘く餳の如しともいへり

蟭螟 小さき事なり故に蚊の睫に集り
居るとゝろ故に蚊の睫に集り

髮生妙方

蛇脫皮 ○蛇の皮を
餅飩の粉を水にそ練りこの膏
菜をのるごとく蛇の衣をよりかけ
廣さに切り右のごとくこれ粉かけを
付元ゝる所にれば髮をろる事妙

必用

此部は五月一ケ月
要用の事とあるを

破軍向方

夜五ツ 午ノ方	夜四ツ 未ノ方	夜九ツ 申ノ方	朝六ツ 亥ノ方
夜八ツ 酉ノ方	夜七ツ 戌ノ方	昼九ツ 寅ノ方	昼四ツ 丑ノ方
昼五ツ 子ノ方	昼七ツ 辰ノ方	暮六ツ 巳ノ方	昼八ツ 卯ノ方

日刻 午ノ日午の刻事とする
用ゆべし月建なり

出行作事 西北の方に向ひて行べし 今月天道西北に行ぬる

樂事 月令に曰く此月や高明に居るべし遠きを眺望すべし山林に遊ぶべしとあり夏山のけしき草木やゝ成長して青葉こゝろよくなる。

○いまだあつさもちのみあるかゝれども至ってさぞ日に長く愛さるべし

○早苗うゑ初るもゆゝしき

○螢見 諸神諸社のけいたい

○五月雨をいとゝ

て志ゝ世わる同じ心の友とちかうあひ書かゝ見るも

ちよのなかなのもあるべし

天氣 此月袍雲起まば舟人

稲豆宜し

○當月不熱十一月不凍

○月内寒ければ旱の兆

養生 今月以後天氣熱する

地に卧し生冷の物を食べ

うゝ是をおそれ悪疾瘧疫を

生ず

○此月屋根に上る事と

忌む精神を脱す

○滋味を薄

くし和を極る事なり昏欲

を節し天樞中脘に灸べし

大暑のころ

をべし精氣を放散せむ

保養

あるゝに保嵩をべし遠望

をへし高明に居るべし

衣服 當月四日まで袷を着す

五日より帷を着す 袴浅黄

衣服 四日まで袷を着

る男子と同 **時の**

衣 菖蒲衣 表青裏紅 杜若 衣紅黄青 楝衣 表紅裏青

夏月衣服の黴を去る法 冬瓜の汁ふひさし洗ふべし 能おちる

又法 枇杷の核を細末にして梅の葉を煎じて洗ひてよく去るべし

又法

青梅枝葉共に冬々貯ふる法

青梅の枝折を兼ね葉も実も藁にてくるくと巻ふて別に梅と皮むきて水に漬し醋を出し其醋一升に寒の水一升二合和して漬てビに入用の時こそ出し水に生るべし葉も実もかちどしてよく〳〵持つ

烏梅を製する法

青梅をとり皮とくづり核を去りかごに入火上にかけ置て後もとめ用ゆ

年中青梅を貯る法

青竹を二つに割り青梅を入きりの如く合せ藁にてくゝり其上を山土にて塗り高地を堀りて埋め置べし来年までも損ぜずして持つ用る時は竹を引さゝ入用なく取りの如く埋め置べし

五月飲食料理献立

好温暖の物を食ふべし此月物腹中却て冷物よろしかるべ

禁 冷物及び生瓜蜂蜜を忌む○物 ○びゝと焼香一時に食ふべからず

谷川の停水を飲べし魚鼈のとぶれ水あゝ是とのゝ疫こゝる

料理

汁 ふとり 竹の子 丸ひら

たい ちさ

くづし 牛房 かいとうな

塩ひらめ

清汁 むさゝぎ

鱠 たい 赤貝 白うり

くるまえび

白うり 抽 岩くけ

差味 すぐき 松茸 あわび

あまぶ えつけ

とべうい ゆ

煮物 もぐき切身 竹のこ

ひらめ

さゝげ

けづり牛房

やきあゆ
くりのる
さかづめ

吸物 たつぐぎ あうざ

小いしかき
うづら
ふうが
志そ

青さだ
すいき

和

會物

くしこ
きろげ
わさあへ

たつうり
さげ
そびくるあへ

小えび
皮ごうて
あとまろ

あうふい
ちあへ
るろわ
うけて

天王ちかづ
いう
青あへ

精進汁

ちくまそ
さくろふ

そうさんぜう
わさげ
くまそ
さくろげ

きすび 志そ

ゆ豆
うどふき

清汁 漬松茸 しめじ

ちつよけ
こやうが

膾

白うり 椎さけ
たこん
うんてん
ちうが

大寺
上ちふ
こうげ
ぜうが

うど

差味

いつこ
あげ
だくのり

かんてんびかいそうる
まくり
椎さけ
こやうが

煮物

ひつこ
大根うけ
まさげ

大根さけ長も
まさげ 梅干

まさけのこ
つまこる
ムろいも

りんぐん豆
あハふ
かもうり

ゆば

和會物

こうで
えぜう
ぐもう

かいどう
くんひ
ぐあ

牛房小昆
たくんさい
うど

吸物の

しめじ
しそ

かいくり
ぐあ

昆まろ
ぐあ
法

五月用意の品 左ニ

貯生姜法 竈の前の土をふく堀て底ニあるうめうとしき其上ニ生姜を置き土をかゝり てよく〳〵久〳〵もたくさんへ

生筍貯ル法 生筍を桶ニ入ること して河瀬のうやき所ニ埋ム 石を重しかけ置へいろ〳〵生ニて能さうのあ貯へやうも右ニ同〳〵

薑塩漬 鰹ざる法 薑をよく〳〵ふきざゝきよく水気を去りて梅酢ニ漬へし漬るよ〳〵茶を少〳〵縮切ニはゝ底へ入置べ〳〵かくのごとくをれば一年を経

てもゝ鱠ゝゝ

極暑の時魚と三枚よおろし大鉢ゝ水一盃入置こて塩と入る事り其後玉子と入て見こべし

玉子沉ひ事ゝゝ又塩と入ゝ

かあんようけ玉い玉子うゝ物ゝ

このかけんひて魚ゝたるつ物也

魚玉子塩法

梅酒の方

古酒一キ　梅二十

砂糖心次第　右梅少し桃のるこを見て花のこれをとり飯粒ゝとして一夜灰汁小漬洗ひ水氣をぬぐい酒へ入るなり

飯の鰒ざう法

莧の菓と飯の上ふ和へ一夜を経てもゝゝゝこと

生魚と貯ふる法

鰮鮒の粉をふりて其中ふ魚をはゝみ油ゝ入れ置い損ゝる事ゝ

又方

寒中の雪水ゝ入れ置ゝ久ゝ損ゝず

五月部終